

SHOW HEY シネマールーム

★★★★

長いお別れ

2019年/日本映画

配給：アスミック・エース/127分

2019(令和元)年6月1日鑑賞

TOHOシネマズ西宮OS

Data

監督・脚本：中野量太

原作：中島京子『長いお別れ』（文春文庫刊）

出演：蒼井優／竹内結子／松原智恵

子／山崎努／北村有起哉／

中村倫也／杉田雷麟／蒲田

優惟人／松澤匠／清水くる

み／倉野草子／不破万作／

おかやまはじめ／池谷のぶ

え／藤原季節／小市慢太郎

👁️👁️ みどころ

若年性アルツハイマー病は恐いが、70歳の誕生日に認知症が判明し、以降それが少しずつ進行していく程度なら仕方なし。1949年1月生まれで、2019年1月に本作の主人公・昇平と同じように70歳の誕生日を迎えた私（＝章平）は、そのように自分を納得させながら本作を鑑賞！

中島京子の原作を簡略化（？）したうえ、松原智恵子扮する妻の存在感をうまく高めた（？）中野量太監督の演出はさすが。あまりに出来すぎて、今ドキめったにない“良き家族”という感もあるが、ストーリーはよくできているし、エピソードの積み重ねも面白い。

ちなみに、アメリカでは認知症のことを「ロング・グッドバイ（長いお別れ）」と呼ぶそうだが、それってホント？和製英語の氾濫はいかがなもの、とも思うが、これは言い得て妙だから、恐怖感を払拭させるためにも、今後定着させればいいのでは・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■ 70歳昇平、そして認知症！こりゃ必見！ ■

商業長編映画デビュー作となった『湯を沸かすほどの熱い愛』（16年）（『シネマ39』28頁）で日本アカデミー賞主要6部門受賞等の快挙を成し遂げた中野量太監督が、同じく「家族」をテーマとした本作に挑戦。しかし、今回はオリジナル脚本ではなく、中島京子の原作『長いお別れ』の映画化だ。そのテーマは、ズバリ認知症。渡辺謙が主演した『明日の記憶』（06年）（『シネマ10』172頁）と韓国のチョン・ウソンが主演した『私の頭の中の消しゴム』（04年）（『シネマ9』137頁）は、両者とも若年性アルツハイマー病をテーマとした名作だったが、本作で認知症になるのは名優、山崎努扮する東昇平だ。長女、今村麻里（竹内結子）と次女、東芙美（蒼井優）の父親であり、妻、東曜子の夫である東昇平（山

崎努) は今日70歳の誕生日を迎えたが・・・。

今や2人に1人がガンになり、5人に1人は認知症になる時代と言われているが、私も2015年9月の66歳の時に直腸ガンになり、その手術を受けた。本作では、「歳をとれば誰でも忘れっぽくなるさ」というセリフが語られるが、それが笑い話で済む間はノーブロblem。でも、夫の今村新(北村友起哉)、長男の今村崇(杉田雷麟)と共にアメリカで過ごしている麻里に、曜子が招集をかけて帰国させてまで、2007年秋の昇平の70歳の誕生パーティを家族揃って自宅で開催したのは、一体なぜ?それは、半年前に昇平が認知症になったという厳しい現実を家族みんなで受け止めるためだ。もちろん、昇平本人はそのことを認識していないが、東家恒例の、三角帽を被り4人で囲む食卓で交わされる会話のトンチンカンぶりに私もビックリなら、麻里も芙美もビックリだ。中学校の校長を務めていた昇平の厳格さは、弁護士としてほとんど家に帰らなかった私の父親ぶり、夫ぶりとは全然違うようだが、昇平と章平と字が違っても同じショウヘイ、そして、今年1月に同じ70歳の誕生日を迎え認知症のお迎えにビクビクしている私としては、こりゃ必見!

■□■ “山崎努70歳” は、サバの読みすぎ? ■□■

俳優、山崎努と言えば、黒澤明監督の『天国と地獄』(63年)、『赤ひげ』(65年)、『影武者』(80年)もあるが、それらはやはり三船敏郎が主演で、彼はその引き立て役だった。それに対して、伊丹十三監督の『お葬式』(84年)と『マルサの女』(87年)では押しも押されぬ存在感で個性的なキャラを見事に演じていたから、この両作が彼の代表作だ。そんな山崎努の直近の作品が『モリのいる場所』(18年)だったが、1936年生まれの彼にはそれがピッタリはまっていた(『シネマ42』未掲載)。しかし、今ドキの70歳は昔の70歳と違って大いに元気だから、本作冒頭、遊園地に3本の傘を持って一人立つ昇平の姿は70歳には到底見えないから、アレレ。もっとも、これは症状が進んだ4年後の春、つまり74歳だということがわかるが・・・。

日本の辻一弘が第90回アカデミー賞メイクアップ賞を受賞した『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』(17年)(『シネマ41』26頁)をみればわかるように、メイクアップの技術は相当進歩しているから、1936年12月生まれの山崎努をもう少し(13歳)若返らせて70歳の誕生日にふさわしい風貌にする必要があったのでは・・・?そう考えると、夫婦の年齢差の設定はわからないが、妻・曜子はその控えめさと従順さからみて数歳年下であることは明らかだから、松原智恵子の方ももう少し若返らせてもよかったのでは・・・?原作の3人姉妹を映画では2人姉妹に設定したのは大いに賛成だが、物語の本筋に関係ないことながら、私はそんな点に少し不満が・・・。

■□■ いい娘たち、いいエピソード。そりゃうれしいが・・・ ■□■

私の70歳の誕生日も事務所では恒例の簡単な誕生日パーティを開いてくれたが、家族揃っての誕生日パーティはなし。それは、私が弁護士として忙しく働いている間、ほとん

ど家にいなかったことが大きな原因だが、私にとってはそのツケが70歳以降いろいろ出ているらしい。それに対して、教師をしていた私の父親は定時に自宅に帰ってくるのが常だったから、中学校の校長だった本作の昇平もたぶんそうだったのだろう。したがって、家では相当厳格だったようだが、自宅での誕生日パーティは恒例になっていたらしい。そんなこともあってか、本作にみる麻里も芙美も何とも父親思いたから、本作を観ていると、そのいい娘ぶりにうっとり。また、2007年から2年後の2009年の夏に、移動ワゴン車の中でランチの販売をやりつつ、自宅で認知症が進んでいく昇平を曜子と共に見守り世話している芙美の姿に思わず胸が熱くなってくる。

他方、アメリカに住んでいる麻里は、アメリカ的感覚を身につけた夫・新との夫婦生活の違和感が最近ポチポチ出てきているらしい。しかし、その原因は「自分の家はどこか？」をどう認識しているかということだし、その点に関する夫との会話を聞いていると、どちらの言い分が正しいかは自ずと明らかだ。息子・崇の夏休みを利用して実家（＝日本）に戻るくらいはいいが、崇にとっては日本に住むおじいちゃん昇平より、すぐ近くに住むガールフレンドの方が大切なことは明らかだ。それでも2009年の夏の時点では、崇は、ガールフレンドへの手紙に「おじいちゃんはたくさんの事を忘れちゃったけど、本人はそんなに悲しんでないのかもしれない。僕は今のおじいちゃんが嫌いじゃないです」と書いていたからまだよかったが、さらに成長してくると・・・？そんな中、昇平は生まれ育った家に帰りがっているのでは、と考えた麻里は両親と崇を連れて昇平の実家を訪れると、そこで東京オリンピックの年に出会ったという父と母の思い出を聞き、夫婦とは何なのかを改めて考えることに。

2009年夏のこんな家族の姿を見ていると、ホントにいい娘たちといいエピソードでいっぱいだから、うれしい限り。しかし、そんな姿と今の私の現実を対比してみると・・・？

■□■昇平の症状は進行。娘たちも大変。しかし・・・■□■

2007年秋の70歳の誕生パーティに見る昇平のポケぶりは、微笑ましい笑い話で済ませることができる。また、芙美の移動ワゴン車に集まってくる子供たちを、昇平が学校の朝礼のように整列させている風景も微笑ましい。キネマ旬報6月下旬号の「映画を観ればわかること」で、川本三郎氏は本作を取り上げ、「微笑ましい」と表現して絶賛しているが、まさに同感だ。しかし、側で一緒に買物をしていた曜子がわからないくらい昇平が堂々とスーパーで万引きしている姿は、ちよつとヤバイ。さらに、いくら「大丈夫よ」と言っても、ウンチいっばいの昇平のパンツを脱がせるのは、いくら娘でも芙美には荷が重すぎるだろう。てなわけで、2007年秋から2年毎に区切ってストーリーを構成させる本作では、昇平の症状は次第に進行していくことに・・・。

他方、結婚願望が薄く、「自分探し」を続けていた芙美は、ワゴン車によるランチ販売をしていた2009年夏に偶然再会した中学校時代の同級生、磐田道彦（中村倫也）との付

き合いを始めていた。道彦はバツイチだったが、そんなことは気にしない芙美にとっては、うまく仲が進めば好都合。ところが、道彦はある日、離婚した妻と娘と楽しそうな“面会”を……。また、アメリカで生活しながら、夫や崇のように英語になじめない麻里は、崇が思春期（＝反抗期）を迎えてくると、さまざまなトラブルに。完全にアメリカナイズされた夫は、優しくいい男なのだが、「家」のあり方について意見されると、麻里はついイライラ。まさか離婚まで考え始めたわけではないようだが、この孤独感が深まってくると、ちょっとヤバイ……。このように、2人の娘たちもそれぞれ大変な状況を迎えていた。

しかし、本作を観ている限り、妻の曜子は終始マイペースで昇平の妻として完璧な存在感を示している。誰でも60歳、70歳になれば病気の1つや2つは発生するもので、曜子も網膜剥離のため手術が必要。放置しておけば失明の危険があるとされたため、入院することになった。しかし、中野量太監督が演出する本作では、その入院のエピソードも微笑ましい。「お父さんの世話をするため、入院期間はできるだけ短くします」と芙美に宣言する姿が立派なら、医師の指示通り、できるだけうつ伏せの姿勢をキープする努力も健康だ。そんな曜子さえいれば、東家はきっと安泰だろう。

私は認知症を恐れ恐れ病氣と恐れながら「本作は必見！」と思って映画館に赴いたが、そんな本作中盤を見ていると、認知症の深刻さを感じることは全くなく、良き家族の微笑ましい風景の連続に、思わずホックリ……。

■□人工呼吸器の可否は？家族たちの選択は？■□

尊厳死をテーマにした『海を飛ぶ夢』（04年）は、重要な法律問題と宗教問題を含め、人間の生きることの意味を根底から問う感動作だった（『シネマ7』197頁）が、本作でも、東京オリンピックの開催が決まり日本中が歓喜に沸いている2013年の秋から冬にかけて、昇平の様態が悪化。そのため『海を飛ぶ夢』に近い問題（？）が急浮上し、アメリカから急遽帰国した麻里を含めた家族たちは、医師から、病状の改善は望めないが、延命のため昇平に人工呼吸器を付けるかどうかの選択を迫られることになる。

本来、こんな問題提起は深刻なはずだが、本作は意外にそうはならず、2人の娘たちは「お父さんならきっと……」と一致した意見を述べていく。ところが、意外にもそこで曜子は娘たちに対して、「あなたたち、何を勝手なことを言っているの！」ときっぱり！さて、そのココロは？また、今ドキはスカイプという便利なものがあるから、アメリカの崇はそれを使って寝たきり状態の昇平と「対話」。そこで崇は、「生きてる限り、生きてほしい」と述べたが、さて、そのココロは？

尊厳死や安楽死を認めるか否かは難しい法的論点だが、延命治療を望むか否かについては、今は元気なうちに明確な意思表示をしておく制度ができています。それが、「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」（厚生労働省 改訂平成30年3月）で、そこでは「本人と医療・ケアチームとの合意形成に向けた十分な話し合い

を踏まえた本人による意思決定を基本とし、多専門職種から構成される医療・ケアチームとして方針の決定を行う。」とされている。また、本人の意志が確認できない場合も、「家族等が本人の意思を推定できる場合には、その推定意思を尊重し、本人にとっての最善の方針をとることを基本とする。」等のガイドラインが定められている。したがって、昇平の場合もこれをきちんとしておけば本作が描くような問題点は登場しなかったわけだが、本作の時代は2013年秋から冬だからそれは無理。そのため本作では昇平がその意思を明確に示すことはできなかったが、人工呼吸器を巡る家族たちの協議とその結論は？

■□■認知症は英語で「ロング・グッドバイ（長いお別れ）」■□■

本作中盤の2009年夏の時点では小学生だった麻里の一人息子、崇の成長は早い。それから4年後、高校1年生となった反抗期の崇は麻里にとってかなり困った存在になっていたらしい。しかし、この崇は認知症になってしまった祖父、昇平の家族の一員として登場させているのだから、反抗期の崇の姿を描くことに何の意味があるの？そう思いながら本作を観ていると、ラストに向けて問題を起こし続ける崇が、校長先生に呼ばれてお説教(?)されると共に、そこで生徒思いの校長先生から認知症のことを英語では「ロング・グッドバイ（長いお別れ）」と言うと教えられるシークエンスが登場する。それを聞いた崇は「なるほど」と納得し、学校を辞める（退学処分を受ける?)について、明るく「ロング・グッドバイ」と述べて手を振るから、面白い。

しかして、認知症のことをホントにロング・グッドバイと言うの？そう思って、ネットを調べてみると、「アメリカでは認知症のことをロング・グッドバイと呼ぶそうです」と伝聞型で書いているものが多い。もっとも、その根拠は、「桂文枝さんの創作落語をTVで観て知りました。」とか、本作の原作、中島京子の『長いお別れ』だったりだから、いかにも怪しげだ。つまり、少なくとも医学用語として、認知症＝ロング・グッドバイと呼ばれるわけではなさそうだ。もっとも、それを正確に解明することは、本作の是非を判断するについてどうでもいいこと。日本にはケツタイな和製英語がたくさんあるが、認知症＝ロング・グッドバイはかなりいい響きだから、今後これを定着させていけばいいのでは？そうなればきっと、「認知症は恐ろしい病気」という強迫観念から逃れることができるはずだ。

2019（令和元）年6月10日記